

Lumen
gallery

EXHIBITION REPORT MIRAI EXPO アニメーション作家・水江未来の宇宙

由良 泰人 (Lumen Gallery プログラムディレクター)

映像ギャラリーである Lumen gallery 最初の展覧会としてアニメーション作家・水江未来氏の個展を開催した。アニメーションとはよく目にする、いわゆる「アニメ」ではなく「アニメーション」という多様な表現のジャンルのことで、その中でも水江氏は現在の日本では異端である“抽象アニメーション”の作家である。彼の作り出す抽象アニメーションの世界は狂気に満ちている。取りつかれたように動きまわる生き物のような記号たちは不思議と心地よい時間を作り出す。意味を求めずただ動いているもので眼を楽しませる快感は、過去に相原信洋氏の作品を観た時に通ずる。相原氏の作品からは 70 年代のサイケデリックな香りがいつもしており、音楽もエスニックなものがよく似合っていた。それに対して水江氏の作品は、その唯一無比とも言える独自のスタイルを貫きながら、商業的な分野でも活躍出来るポップなテイストに仕上がっている。実際に制作されたミュージッククリップを観ても実にしっくりと画面と音がマッチしており、楽しい雰囲気作られている。その反面「MODERN」(2010)を大野松雄氏が音響デザインしリメイクした「RETRO FUTURE」のように大野氏のスペーシーなサウンドにも負けない画面を作り出す彼の深さも非常に興味深い。そんな魅力的な作品たちは世界中の映画祭でも称賛されている。それらをついにパッケージし公開された映画「ワンダー・フル!!!」のトリを務める「WONDER」は狂気に磨きがかかり、1 日 1 秒 1

年間制作された約 6 分ほどの中に展開されるアニメーションは、作品(制作)時間と共にいるものも削ぎ落とされ、意味やストーリーなどなくとも観ているものをハラハラドキドキさせ心をつかむ。一般的に視聴者は映像に対して意味を求めがちであるが、その罅罅から逃れて新しい表現をしようともう 100 年も前からオスカーフィッシャーやノーマンクラレンといったアニメーション作家たちが抽象アニメーションを制作し挑戦を続けてきた。その甲斐もあってか映像表現の中でアニメーションは最もハイコンテクストなジャンルで抽象的な表現は受け入れやすい面はあるが、それでもまだ意味やストーリーを求めてしまう人は多い。つまり意味がないことを嫌う人は多い。そんな中 90 分の劇場版抽象アニメーション「ワンダー・フル!!!」を全国劇場公開したことは快挙である。多くの人が本館で楽しむ無意味の有意義を感じたに違いない。またクラウドファンディングを活用し、35mm でのフィルムバージョンまで制作されたことも興味深い。今回の個展では、「ワンダー・フル!!!」で上映された作品だけでなく、未公開のものや、その後に制作された新作を含めて水江未来作品のすべてといえるほどの展示をした。そこから通して見えることは、今までの商業と非商業の間に在った表現の境を越え、自由な表現で作品を気負うことなく制作し発表する活動スタイルは、従来の映像作家とは異なる、新しい世代の作家として作品と共に注目していきたい。

Schedule

■オガサワラ ミチ展 “tone”

2015 年 6 月 19 日(金)～28 日(日)

2015 年に制作した立体、ドローイング、ペインティング作品の発表します。初日の夜に公開制作(ライブペインティング 1 点)後、展示を行います。

6:19 opening Open 19:00 Start 19:30
入場料: ¥1,000 (くじ付き) + drink ¥300 (飲み放題)
電子音楽 × 絵 Masahiko Takeda × Michi Ogasawara (電子音楽家と画家の実験的ライブセッション)

6:28 closing
入場無料
OHP ライブドローイング
DJ : Masahiko Takeda

■原神 玲 初期映像作品 上映展

2015 年 7 月 21 日(火)～26 日(日) [予定]

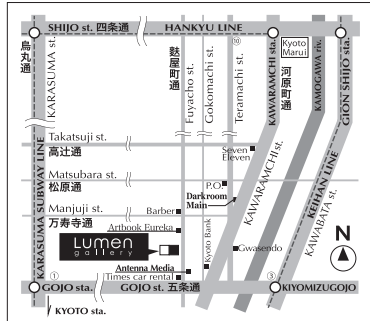
上映作品・スケジュールは後日詳細を発表します。
入場料: ¥1,000

※原神玲の直筆絵コンテ・シナリオ、スナップ写真等の展示も同時開催!!

■VIDEO PARTY 2015

2015 年 8 月 1 日(金)、2 日(日)

作品を募集しています。詳細は以下の URL にて
http://www.personaley.es.jp/vp/entry.html
主催: PERSONAL EYES + AF



Lumen
gallery

www.lumen-gallery.com
info@lumen-gallery.com
090-1144-4746
090-1158-8238
090-8448-9737

〒600-8059 京都市下京区越前町通五条上る
下鴨形町543 有隣文化会館2F

Yuurin Bunkaikaikan 2F, Shimourokogata-cho 543,
Shimogyo-ku, Kyoto 600-8059 Japan

- 阪急京都線「河原町」駅10番出口より寺町通を南へ徒歩約10分
- 京阪電車「清水五条」駅3番出口より西へ徒歩約5分
- 京都市営地下鉄烏丸線「五条」駅1番出口より東へ徒歩約7分
- 京都市バス「河原町五条」バス停より徒歩約2分

メディア都市京都 第1回 - 歴史的な粗描 -

森下 明彦

やや大袈裟な言い方かもしれないが、京都もメディア都市の一つである。映画産業の中心地であったことがその根拠であるが、幅広く見渡すと別な様相が浮んでくる。これから連載する本稿では、この Lumen Gallery が湧き湧きしようとする個人的映像制作を含んだ、京都という都市の映像と美術の水脈を歴史的に俯瞰することを狙いにしている。本格的なものは将来の課題として、ここではその素描を試みる。メディア都市京都で活躍した先達の足跡を辿る旅に出掛けたい。【註1】

まずは 1891 (明治 24) 年にまで歴史を遡行したい。その年の 7 月 5 日、新京極の、現在は MOVIX 京都 (その前は京都ロキシー、さらにそれ以前が京都座) となっている場所にパノラマ館が誕生した。円形の建物に収められた、360 度の周囲全部が精緻な写実描写の風景画 (しばしば、戦場のそれであり、新京極の場合、何とアメリカの南北戦争が描かれてあった。画家は後出の浮世絵師、野村芳園。その後、絵図の取り替えが何回もあった。ただし新京極のそれが円形のパノラマ館であったかどうかは、残念ながら実は不詳である)——観客はその中心にある展望台から一望するのであるが、そのすぐ下から壁際の絵まではこれまた巧みな造作 (偽景) が続いている。実際の場所に立って光景を見渡しているかのような現実感と共に、独特の眩暈もが得られる。最近では美術家のやな

NEWS
VOL.01



VOL.1 issue 2015.5.25



森下 明彦 (メディアアーティスト / 美術・音楽・パノラマ愛好家)
美術と映像に関する調査研究を続ける。その知見を作品制作に反映させるとともに、上映会の企画も行う。個人的に制作された映像作品の保存のための、アーティストが運営する組織の創設を準備中。

ぎみわがその演劇の主題に取り上げていることもあり、再度陽が当たったようである。この 19 世紀の「マス・メディア」(シュテファン・オッターマン) は、この国では前年の上野と浅草のパノラマ館を嚆矢として、京都のそれは大阪 (難波) に遅れること、6 ヶ月程であった。

少し経った 1895 (明治 28) 年の第四回内閣勲業博覧会時には、現在の京都国立近代美術館の北西側の疏水沿いにそれが 2 館建ち、また円山公園にはパノラマの言わば兄弟分であるディオラマの興行もあった (前記の新京極のパノラマ館も存続していた)。その後も 1904 (明治 37) 年頃まで場所や建物を違えてはいたが、展覧が行われていた。もちろんこの国の主な大都市にはパノラマ館が建設されていたのであるが、京都の場合は数において、東京に次いでいたことを忘れてはならない。従来パノラマは映画の登場によって衰退・消滅していったと理解されていたが、上野パノラマ館のように 1911 (明治 44) 年になっても新しい絵図に交換して再度開館していることもあり、私はそうした説にはにわかに賛同しない (博覧会などのパヴァリオンとして活用される例が増加することもあるが)。

さて、その映画であるが、この国の最初期のそれ京都を舞台としていた。百万遍の南に位置する

アンスティチュ・フランセ関西 (以前の関西日仏学館) に、その名を抱いた講堂がある稲畑勝太郎はリュミエール兄弟の知人であり、誕生したてのシネマトグラフを日本に持ち帰った (技術である、フランソワ・コンスタン・ジェルも同行した)。稲畑たちは河原町通りに面した京都電灯会社の敷地で、シネマトグラフの試写を行った (二代島津源蔵が貢献したとも言われている【註 2】。なお、この場所の北東側は旧立誠小学校である)。時に 1897 (明治 30) 年 2 月中旬、リュミエール兄弟のバリでの一般有料公開 (1895 [明治 28] 年 12 月 28 日) の約 1 年と 2 ヶ月後と言う早い時期である。

残念ながら、最初の一般上映は 2 月 15 日から大阪 (難波の南地演舞場) で行われたのであるが、引き継いで 3 月 1 日から開催された京都での上映は、新京極のパノラマ館のやや南西側、元東向演劇場 (京極座) においてであった。

【註 1】この小文の執筆にあたっては、西村智弘の優れた論考、「連載: 日本実験映像史」全 33 回 (『あいだ』87 号・123 号 / 2003 年 3 月・2006 年 3 月) を参考にした。著書としての刊行を望みたい。

【註 2】展覧会カタログ「京都新聞創刊 130 年記念 前衛都市モダニズムの京都展 1895-1930」(京都国立近代美術館 / 2009 年 / 158 ページ)。なお、大阪よりも前に京都で公開されていたとする研究もある。埴明浩 & 京都キネマ探偵団編「京都映画図録——日本映画は京都から始まった」(フィルムアート社 / 1994 年 / 132~133 ページ)